

都道府県U12カテゴリー取り組み紹介

[北海道]

「未就学児童・低学年層へのアプローチ及び合同チームの取り扱い等」



vol.1
2021/6/8

1. 背景

少子化や放課後の過ごし方の多様化、更には、保護者の共稼ぎによるチーム協力の困難性の高まり（役員回避等）から、多分に漏れずどのチームも維持・運営が困難な状況に置かれています。

一般財団法人北海道バスケットボール協会（以下「HBA」と言います）としても、ミニバスチームを維持する上で以下の問題点を整理して諸対策を取り組んできました。

①指導者の質の向上（特にミニバスの指導者は苦情が多いため）

- スポーツドクター辻 修一氏の講演会（2014年～2018年度 5回実施）
- 「ミニバス指導者のあるべき姿」ほかHBA文書発信（数知れず）

②目に触れる環境整備

- ミニバス及び中学生大会のテレビ中継
- 日本ミニ共催による全国統一団員募集ポスターのチーム配付（2017年～2018年度）

③直に触れる環境整備

- 幼稚園、保育園へのキッズコールの配付（2017年度～）
- 年少児童のバスケット体験（メモリアル大会・イベント時のフリースhootコーナーの設置）
- フレッシュ、ミクロ大会の普及促進

どれもまだ、道半ばであり、胸を張ることはできませんが（特に指導者の質の向上）、今回は「③直に触れる環境整備」と「合同チーム」についての取り組みをご紹介します。

2. キッズゴール配付

2013年に神奈川県平塚市で市内全ての幼稚園・保育園にバスケットゴールを寄贈した取り組みを知り、早速、北海道でもできないか。しかし、その規模はあまりにも大きい…

そう悩んでいたところ、レバンガ北海道でも2015年から小さなゴール（バックボード）を道内に30か所寄贈する事業を展開。

また、当時の日本ミニ連盟でも普及対策事業費の一部助成を始めたことから、HBAの独自経費を上乗せし、毎年18か所（北海道の行政区14+政令指定都市札幌には+4）を計画的に毎年寄贈し、幼少期のころから「ゴール」が身近にあって、「ボール」をゴールに入れる「玉入れ=シュート体験」をしてもらうことに取り組んでみました。

2017年度から始めたので、まだその成果が実感できませんが、何人かは「園にゴールがあった」という声を聞いています。

今まで寄贈してきたのは、最大260cmまで伸びるバスケットゴールですが、2020年度にはJBA_U12部会と連携し、壁に貼り付けることができるゴールのみのタイプにして、20園に寄贈したところです。これからもより多くの子どもたちが遊んでもらえる環境を整えていきたいと考えています。

また、地元Bリーグクラブのレバンガ北海道と連携して、園に寄贈する際、プレイヤーにも訪れてもらえるよう連携を図って参ります。



釧路市 貝塚幼稚園



室蘭市 室蘭幼稚園

3-1. バスケ体験（メモリアル大会）

2006年のFIBA世界選手権大会（現：ワールドカップ）の予選ラウンドを北海道で開催したことを記念に、翌年から「メモリアル大会」と称して北海きたえーる（道立体育センター）で開催しています。

メモリアル大会は、メインアリーナで4面、サブアリーナで2面を利用し、ミニバスから高齢化社会に対応するクラブ（要するにシニア）、更には、車椅子など多くのカテゴリーが一堂に参加し、ミニバスの隣で社会人がゲームをする等、壮観な大会です。

その中でミニバスは、2年生以下の「ミクロ」、4年生以下の「フレッシュ」カテゴリーを中心に参加を募っていますが、過去、個人的な繋がりや幼稚園に呼びかけ試合体験を行ったことがあり、実際、超OB（つまり、おじいちゃん、おばあちゃん）との試合を組むなど、微笑ましい状況もありましたが、問題も数多くあり、園児の参加は継続できませんでした。

<問題点>

- ① 事故の補償～保険加入（掛け金は誰が負担するのか、その加入手続き）
- ② 送迎（公共交通利用は困難なので園のバスか、主催者準備か）
- ③ 曜日の問題（開催日が平日ならば園の公式行事か、土日ならば参加可能か）

試みとしては良かったのですが、園そのものを参加させるには多くの問題点があり、大規模大会で呼び込むより、地域のローカル大会で個人の繋がり（現団員弟や妹の友達など）を通じた「おもしろ体験」でゲーム性豊かに参加（遊び）を促すことへシフトする必要性を感じました。

こうしたことから、市町村レベルでの大会（というよりイベント）とし、1チーム5～6人で、しかも、当たってもいたくない「ソフトボール」や「軽量ボール」（いずれも市販の物）で試合もどきやシュートだけ体験させたり、地域ごとに思考を凝らして取り組んでいます。

3-2. バスケ体験（イベント時のフリーシュートコーナーの設置）

北海道の街角・公園に、公的なバスケットゴールはほとんどありません（理由は雪による維持費がかかるため）。逆に、家の敷地に余裕があるため、個人宅には多くのバスケットゴールがあります。

そうすると、バスケに興味がある子どもがシュート体験するには、「体育館」か「知り合いの家の前」だけです。

そこで、比較的時や敷地に余裕があるイベント時にキッズゴール配付事業で余分に一つ購入し、持ち出し用にしたものを設置してみました。

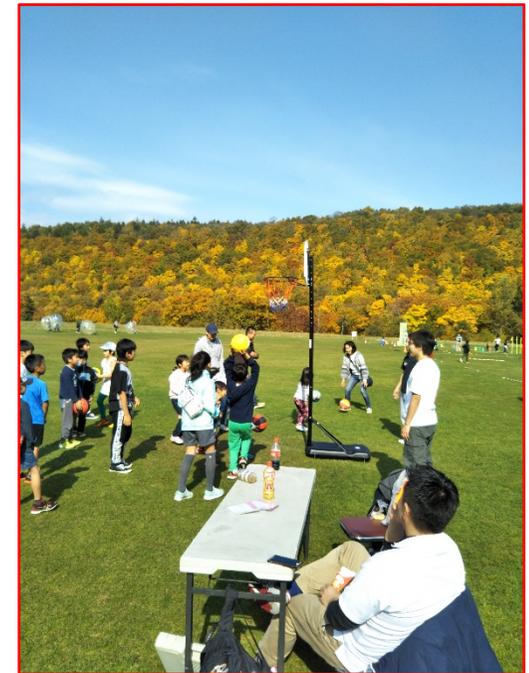
写真のイベントでは、他にも「サッカー体験」、「バレーボール体験」、「ラグビー体験」などのコーナーがありましたが、開会から閉会までずっと子どもが張り付いていたのが「バスケコーナー」でした。

ただ、ゴールを設置しボールを置いていただけで、自由にシュートするというものでしたが、子どもたちだけではなく、保護者も一緒に…。

保護者には「スラムダンク世代」が多く、自分はやっていないが一緒にやってみたくなくて…そんな声も聴きました。

もちろん、経験者も多かったのですが、潜在的に相当の人が興味を持っていると感じたところです。

このイベントで体験してからミニバスチームに入った子どももいました。



キロロ
秋のスポーツと食のイベントにて

4. 合同チームの取り組み

<目的>

近年、団員の確保が困難な状況から低学年が試合に出場しなくてはならないチームの増加、あるいは団員数が大会出場の規定に満たないため、チームの統廃合を余儀なくされている状況が散見される。

低学年の児童が出場し試合を行うことは、体格差の違いなどから非常に危険な状態も想定される。

また、規定人数に満たないチームが増え、地域内での統廃合が進むことは、競技の根本をなすU-12世代のチームが地域から無くなることとなり、チーム存続はバスケ界のみならずスポーツ界の普及育成世代であるU-12に欠かせない大きな要因であることから、安易な合併を行わずに大会参加を可能とすることを目的として、北海道ブロック大会並びに北海道大会の本大会及び予選（以下「ブロック大会等」という。）に参加するメンバーの望ましいプレイヤーの選考、及び、規定人数に満たないチームの参加の準用の申合せ事項を定め、幅広く活動できることを目的とする。

要するに、簡単にチームを消滅させずに、日常の活動の足場を維持しつつ、人数に恵まれないチームが大会に参加できるようにしよう！というものです。

このほか、低学年を大会に参加させるには「けが等の危険回避」に努めることや大会エントリーの仕方などを「申合せ事項」として基準を明示したところです。

参考としてその資料を併せてご一読ください。

5. 大会時での施策

□ ハーフタイムを活用したミニゲーム

「折角、大きな大会にきたのに試合に出られずに終わってしまった…」

「出してあげたかったのに競っていたので出場機会を失ってしまった…」

そんな悲しい思いをしたプレーヤー、させてしまった指導者。

大きな大会であればあるほど、そうしたことがあると思われれます。

ベンチにいても大きな経験ですがやはりユニフォームを着た以上試合に…

そこで北海道の短い夏休み期間中に2日間で4試合を行うフレンドリーシップのリーグ戦で「夏の全道大会」と呼んでいる「北海道夏季交歓大会」があり、この大会を活用して2018年度からハーフタイム時に控えメンバーによるミニゲームに取り組んでみました。

※第1日 移動日・指導者研修会・保護者説明会兼研修会・審判研修会（開会式なし）

※第2日～第3日 男女各4ブロック（1ブロック7チーム）による変則リーグ戦
8コートを使用・表彰無し・順位決定無し・閉会式なし

※第2日の夜 チーム指導者・保護者・審判・役員の情報交換会の開催

※2020年度から参加チームを増やし、1ブロック8チームとしたが無念の中止

審判は互いのベンチから1名ずつ出していただき、試合は5分間の流し。試合結果には関係ありませんが気分は全道大会。大会期間中に最低でも4回の出場機会を得られるようにしました。

予想以上に好評で、早速、各地区の諸大会で取り入れるなど一気に広まったところでした。

6. 終わりに

子どもがやりたがっていても、保護者の就労環境で、チームに関われないという課題は大きなウエイトを占めます。

このような場合、チームに直接入らなくても、月に1~2回遊び体験できる環境を作り出すことができれば、（保険の問題もありますが、）風向きが変わってくるのではないのでしょうか。

しかし、それを指導者が少人数で対応するのは非常に困難です。小さな子どもは目を離すことができません。

また、会場は、公的な体育館を借りるのも経費がかかります。チームの練習会場を開放するにも、練習もあれば、学校開放の範囲であれば「目的外利用」にも抵触する場合があります。

教員がいるチームでは学校のサービス範囲で…では、いないところは？
いても、働き方改革で制限も…

地元の協会（と言ってもローカルの非公式な付き合い程度のものも）では資金援助が困難。会場をローテーションして色んなところでやりたいのですが、人も会場も経費も。

「前年度から計画的に」というところも、なかなか困難なものがあります。

都道府県協会でそういう流動的な資金枠を確保し、臨機応変に対応できることが大事だと感じます。

その一つに、HBAとして（よく思い付きと言われていますが）、普及対策を重視する専務理事の応援（発案）で、Bリーグ期間中ではありますが、レバンガ北海道の協力を取り付け、別紙のような「エンジョイスクール」ということにも取り組んでいます（結果的にコロナでまた中止）。

会場の確保などの問題もありますが、まずは「動いてみる」ことが大事だと感じています。そして、失敗したら何がダメなのか修正してまた…

協力者・指導者・運営側の人手の確保も大きな問題です。一人一人の負担を平準化して薄く広くしたいものです。